

【研究ノート】

保育保健を支える看護職の実態

The Actual Conditions of Nurses Who Support Health Care in Nursery Schools

八田早恵子, 金城やす子

要旨

保育園において、乳児保育やさまざまな医療に関連したニーズをもつ子どもの保育を保育保健と位置づけている。保育保健の実践者として看護職の配置が求められ、看護職を配置する保育園が増加している。そこで現在の保育園看護職の実態と保育園が看護職にどのような業務役割を期待しているのかを明らかにするため、全国2,025か所の保育園の保育所（園）長を対象に質問紙調査を行った。またそのうち看護職が配置されている場合、看護師へも質問紙調査を依頼した。649施設（回収率32%）から回答があり、そのうち351人（看護職配置ありと回答した施設383の91.6%）の看護職から回答を得た。保育園看護職の経験年数は平均6.8年（SD±6.3）であった。保育園看護職以前の看護実践経験では、複数の看護実践経験を持つものが多く、小児看護経験者が134人（37.9%）であった。全体では成人看護経験者が最も多く259人（73.8%）で、そのうち163人（63.2%）は小児看護の経験を有していなかった。保育園の業務は「難しい」「思っていたよりも難しい」という回答が、270人（76.9%）であった。保育園の看護職は、小児看護経験を持たず、初めて大勢の子ども達と接し一人配置という状況も多く、思っていたより業務は難しいと感じ、対応にも苦慮している実態があった。また発達に問題を抱える児については「とても多くなっている」「多くなっている」と感じているものが280人（79.8%）であり、82人（23.4%）が「専任の保育士を配置して欲しい」と希望していた。

保育園で働く看護師は、他園の看護職との情報交換や研修の機会を切望していることが明確になった。保育園の看護職に必要な支援は、保育園看護職としての業務の確立をすること、さらに他職種との連携を促進することが重要である。

キーワード：保育保健, 保育園看護師, 保育園, 発達の気になる子ども

I はじめに

保育園において、乳児保育やアレルギー疾患をはじめ医療的なケアや処置など医療に関連したニーズをもつ子どもの保育を実践することが多く、そのため保育保健という取り組みが推進されつつある。保育保健を実践するためには、保育園に看護職の配置が必要とされ、徐々に看護職を配置する保育園が増加している。保育所における看護師等の配置については、1969年に初めて国からの通達がなされた後、1977年に乳児保育指定保育所制度として、乳児3人に対し1人以上の職員を配置し、9人以上の0歳児を保育する場合、看護師または保健師を1人配置することが義務づけられた¹⁾。しかし、看護職の配置枠は保育士の定数内配置であることから、配置が進まない実態もみられる。2009年度は22,898箇所の認可保育園に看護職は5,391人（23.5%）の配置であり、2013年度には6,668人（29.3%）とやや増加している²⁾。しかし

まだ全国規模での保育園看護職の実態については、十分な調査がされず、配置の実態や業務内容については明らかにされていない。そこで配置されている看護職の実態および看護師に期待される役割、保育園看護師の業務内容、必要としている支援を明らかにするため、全国2,025か所の保育園の保育所（園）長を対象に質問紙調査を行った。その結果649か所の施設から質問紙の回答があり、23の白紙回答を除き626か所（31.3%）の保育所（園）長の回答を分析対象とした。金城ら³⁾の第1報として、保育園のうち看護職の配置は383か所（61.2%）で、0歳児が9人以上の施設への配置は339か所（72%）であり、保育所（園）長の保育園看護師に期待する役割は、「保育業務」「健康管理業務」「健康教育業務」「医療の専門職としての業務」「相談活動業務」が挙げられていることを報告した。また障害児の受け入れ、医療的ケア児の受け入れについては、看護職の配置のあるもので障害児を受け入れているものは118か所（30.8%）、医療的ケ

アを要する子どもの受け入れは16か所(4.2%)であった。そこで本研究では、保育園看護師による回答を分析し、保育園看護師の看護経験や実際の業務における問題、必要な支援等を明らかにしたい。

II 研究目的

本研究では、保育園に働く看護職がどのような看護経験を有しているのか、また保育園での業務における問題や困難感、支援の必要性について明らかにする。

III 研究方法

1. 研究対象

46都道府県のホームページに掲載されている保育施設一覧の中で、保育数150人以上を定員とする保育園2,025か所を抽出し、保育園の保育所(園)長を対象に質問紙調査を行い³⁾、(649施設から回答を得た。)そのうち看護職が配置されている施設の看護職に対し質問紙調査を実施した。看護職が配置されている保育園は383施設であり、そのうちの351人(看護職配置施設383の91.6%)の看護職から回答を得た。

2. 研究期間(調査期間を含む)

2014年1月～7月

3. 調査方法

無記名自記式による質問紙調査、郵送留め置き法とした。

4. 調査項目

- ①属性(保育園看護師としての経験年数、看護実践経験、年齢、性別等)
- ②保育園看護師について(保育園勤務の理由、業務内容、業務の困難さ等)
- ③発達が気になる子どもの支援について(発達が気になる子どもの数、関わり方等)
- ④保育園看護師への支援体制について(勉強会、学会等の参加、必要な支援内容等)

5. 分析方法

データ処理には、SPSS Statistics Ver22およびSPSS Text Analytics for Surveys Ver4.0.1を用いた。

6. 倫理的配慮

調査対象者に、研究目的、方法、データ処理、個人情報保護の保護、公表について、文書で説明した。個人や施設が特定されないよう匿名性や守秘性について明記した。研究への同意については、質問紙の回答を郵送されることで同意が得られたとする旨、文書にて説明した。研究にあたり、名城大学人間健康学部倫理委員会の承認を得た。

IV 結果

調査は、351人から回答を得、すべてを有効回答として処理した。未記入の扱いについては、項目ごとに異なることから各図表内にデータ数(n)を表示した。

1. 対象者の属性および保育園看護職の経験年数

351名の保育園看護師全員が女性であり、既婚305人、未婚38人、無記入7人であった。

年代は、20代19人、30代72人、40代110人、50代104人、60代37人、無記入9人であった。

保育園看護職の経験年数は、平均6.8年(SD±6.3)、経験年数は半年から最大30年であった。保育園に勤務する以前の看護実践経験では、①小児看護、②成人看護、③高齢者看護(病院)、④高齢者看護(福祉施設)、⑤母性看護、⑥看護教育、⑦保健師(保健所、役所)、⑧その他の項目を提示し複数回答を求めた(図1)。看護実践経験において、小児看護経験を持つ者が134人(37.9%)であった。全体では成人看護の経験者が最も多く259人(73.8%)で、そのうち163人(63.2%)は小児看護の経験を有していなかった。その他では、手術室、ICU、精神神経科、耳鼻咽喉科、歯科、診療所、乳児院、児童養護施設、重症心身障害児肢体不自由児施設、訪問看護、養護教諭、健診センター、ペインクリニック、ホスピス等多岐に渡った看護業務を経験していた。また保育士として勤務し、後に看護師の資格を取って保育園看護師として勤務しているものも1人いた。

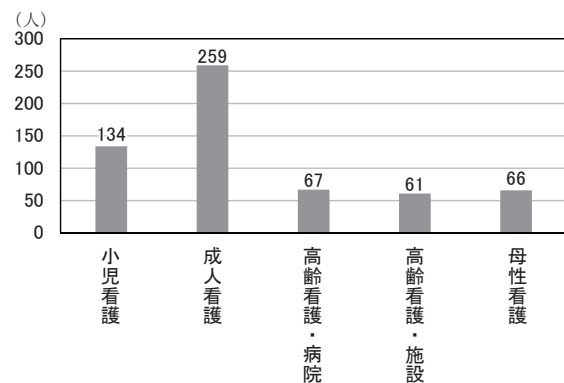


図1. 看護職の看護経験の内訳 n=351(複数回答)

2. 保育園での勤務を希望した理由

保育園での勤務を希望した理由は、「子どもが好き」、「夜勤がない」、「知り合いに頼まれたので就職した」、「人に勧められた」、「その他」からの選択回答とした。図2に示すように20代、30代は「夜勤がない」ことが多く、40代、50代、60代は「知り合いに頼まれたので就職した」が多かった。また各年代とも「子どもが好き」と回答し

たものが多かった。その他の回答では、「勤務時間が短く家事との両立ができると思った」、「子どもが通っていた保育園から声をかけられた」、「市役所の人事異動」、「地域の看護協会の斡旋」等があった。

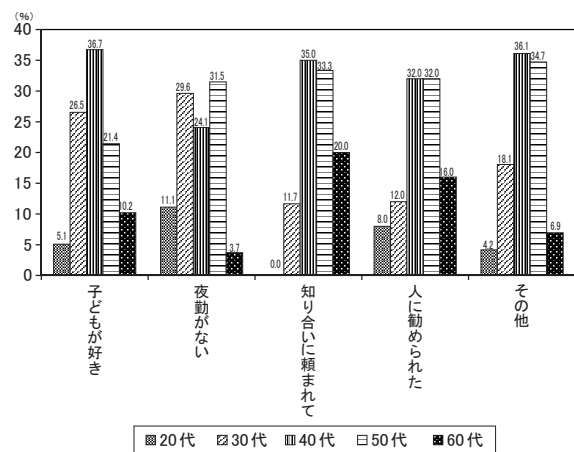


図 2. 保育園を希望した理由 n=345

3. 発達が気になる子どもの支援について

保育園において発達上の問題を抱える子どもが多くなっていると感じるかどうかの問いについて、「とても多くなっている」「多くなっている」と感じているものが、280人(79.8%)であった。

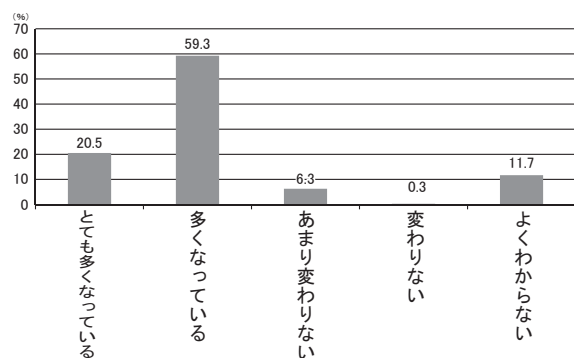


図 3. 発達に問題を抱える児 n=345

発達に問題を抱える児への関わり方について選択肢を提示して回答を求め、図 4 に示した。発達に問題を抱える児への関わり方では「関わり方がわからない」57人(16.2%)、「看護の基礎教育では学習してこなかった」28人(8.0%)、「看護師の業務の範囲を超えている」16人(4.6%)などの回答があり、発達が気になる子への支援には「専任の保育士を配置してほしい」82人(23.4%)と希望するものが多かった。一方、「関わり方について独自に勉強している」111人(31.6%)の回答がみられた。

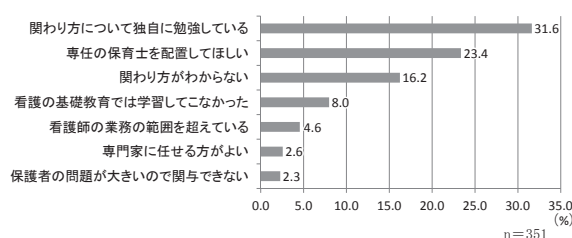


図 4. 発達に問題を抱える児への関わり方 n=351

4. 保育園業務について

保育園業務は難しいと感じるかどうかの問いでは、「難しい」「思っていたより難しい」と回答したものが、270人(76.9%)であった。「特に難しいとは思わない」は、2割弱であった(図 5)。

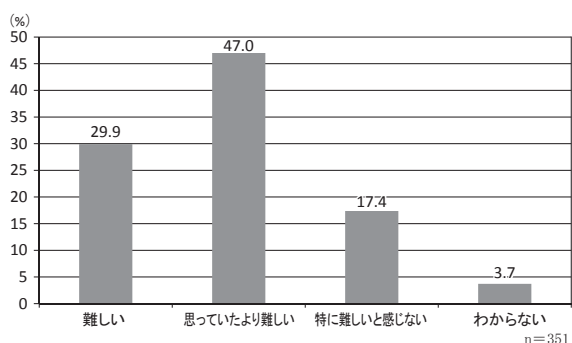


図 5. 保育園の業務は難しいと感じるか n=351

「保育園業務の困難さ」について、記述内容をまとめ、表 1 に示した。記述内容はデータマイニングを用いた感性分析キーワードで頻度の多いものを示した。キーワードを下線で表し、キーワード後の()内に頻度を示す。351人中284人が記述しており、現状や状態から医療的な判断をすることの難しさや一人配置による困難さなどが記述されていた。

表 1. 保育園の業務の困難さ

保護者 (72) との関わり方、保護者によって考え方が異なる
子ども (65) の症状の判断 (35) が難しい、各年齢の子どもに応じた対応・声掛けが難しい
看護と保育 (24) の立場のずれ、清潔について考え方の違い、保育士 (64) との人間関係
看護師 (51) が一人 (26) だと何でも任される、ほぼ一人で対応しなければならない、自分一人の判断で動くことの重圧
保育園 (25) の求めている業務 (20) と自分が必要だと思う業務のギャップ
クラス担当など保育 (24) も行わなければならない、看護業務 (20) が出来ない

経験 (14) のない診療科受診の判断, 病気 (24), 発疹 (7) の判断
本来の役割が理解 (16) されず0歳児担任の保育補助のみ, 保育の手伝いをさせられる
保護者対応 (11) や保育士さんへの保健指導 (6), 相談相手 (7) がいない, 仲間が出来ない
病気の予防から衛生面 (6) について, 家族の方, 職員への周知の難しさ
保健業務 (5) をする時間がとれない

小児医療の知識 (35), 小児救急について, 保健の知識
保育園で働く看護師の交流 (24) の場をもっと増やした方がいい, すべての園に看護師がいるべき, 法的な支援 (16) による義務付け
判断に迷う時に相談 (21), 助言してくれるところがあるとよい
一人配置 (17) のため休みにくい, 規模が大きい所は複数配置 (17) してもらえるような援助
きちんとした組織体制 (例えば正職員 (3) 採用など), 給料 (8) をもう少し上げて欲しい
園長 (5) や主任の理解, 保育園看護師 (10) としての専門性を理解してくれる園
役割分担のマニュアル (5) を全国統一で作成してほしい
保育園で生かせる感染のガイドライン (3)

5. 保育園で働く看護師の支援体制について

保育園の看護師として情報収集や情報交換の場があるか, 参加の機会が用意されているのかどうかを尋ねた。看護師を主体とした勉強会や研修会への参加の有無について, 図6に示した。249人(72.4%)が参加したことがあると回答していたが, 保育園看護師に関連する学会への参加の有無は, 参加したことがあるは, 106人(30.8%)と少なかった。

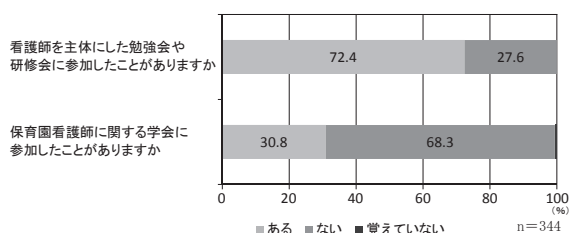


図6 勉強会, 研修会, 学会への参加 n=344

また自由記述の「看護師が保育園で働くために必要な支援」についてデータマイニング(キーワード検索)を用いてまとめ, 表2に示した。キーワードを下線で表示, キーワード後の()内に頻度を示す。351人中298人の記述があったが, 保育園で働くための立場の明確さ, 業務役割のマニュアル作成, 統一化を求めるものが多かった。また一人配置の看護職として, 情報収集, 情報交換の場を求めるものが多くみられた。

表2. 看護師が保育園で働くために必要な支援

他園の看護師 (111) のネットワーク (5), 情報交換 (39) や勉強会 (54) が必要
他職種との連携 (13) が重要, 役所や保健センターからの感染情報や最近の予防接種状況・治療法などの情報 (64), 知識 (35) が必要, 近隣の小児科医 (3) とのつながり
学ぶ機会が少なすぎるため保育園看護師専門の研修会 (35) や意見交換 (12) 会
研修会 (35) の開催, 保育園看護師 (20) 向けの雑誌や機関誌, 本

V 考察

看護師が保育園を選択する基準として, 20~30代は夜勤の有無, 40~60代は知人・友人から頼まれて選択するものが多かった。また小児看護の経験を持たず, 初めて大勢の子ども達と接し一人配置という状況もあることから, 思っていたより難しい業務であると感じ, 対応にも苦慮している実態があった。保育園勤務は, 昼間だけの比較的楽な業務と考えられていたが, 実際には多くの困難を抱えている実態がみられた。なかでも発達障がいが気になる子どもの存在については多くなったと感じ, その関わり方についても苦慮しており, 独自に勉強しながらも確立されたものがないため, 対応の難しさから, 業務の範囲を超えていると考える看護師が多かった。また専任の個別対応ができる保育士の加配を求める意見も多かった。保育園で一人配置の多い看護職として, 医療面対応にプラスして発達障がいを持つ子どもという観点から対応していくことは過重負担であり, 加配の必要性を痛感していると考えられる。

丸山ら⁴⁾は, 保育所・園(保育施設)におけるけいれん性疾患の管理の現状と課題で, 「保育園に園医・委託医は配置されていても, きめ細やかな健康管理のためにも看護師等の医療専門職の配置が必要」と指摘している。しかし, 保育園の業務について看護師は, 子どもの症状に対する処置や疾患等に対応すること, 保護者への働きかけに対すること, 保育士と同様のクラスを担当するなど, 保育園の要望と看護師業務との兼ね合いの難しさ, 一人職種や保育士間の人間関係等, 多くの困難感を抱いていた。しかし困難感を感じる看護師に保育園で働くための必要な支援は十分ではなく, 福井⁵⁾が述べているように短期間での離職に繋がっている。看護師は,

全国統一のマニュアルの必要性や保育園看護職としての業務の確立、園長をはじめとする園の看護職に対する理解、組織体制や雇用条件、小児医療看護の知識等を求めており、さらに行政や保健センター・小児科医等他職種との連携の必要性も求めていた。チームという組織で働く職種である看護師に対し、一人配置の業務はそれだけで大きな負担となっている。神谷⁶⁾は、保育園看護師会の取り組みについて「保育園看護師という仲間とのコミュニケーションの場があることで、安心感と自信につながり、支援者による講習会や情報・アドバイスにより保育保健に関するスキルアップができています。」と述べており、本調査の結果からも、保育園看護師間の情報交換やネットワークの構築、研修の機会の提供は、保育園で働く看護師に必要なサポートであると考えられる。

VI まとめ

保育園の看護職は、小児看護経験を持たず、初めて大勢の子ども達と接し一人配置という状況も多く、思っていたより業務は難しいと感じ、対応にも苦慮している実態があった。また保育園看護師間の情報交換や研修の機会を切望していることが明確になった。さらに、保育園の看護職のために必要な支援としては、保育園看護職としての業務の確立や他職種との連携の促進が重要であることも明らかになった。

VII おわりに

保育園にどの程度の看護師が配置されているのか、全国の認可保育園22,000か所のうち、看護師の配置が多いと考えられる0歳児保育が多い保育園を抽出し、調査した。この研究では、地域による差、また設置主体による差を明らかにするには限界がある。今後の課題として、さらにサンプル数を追加した調査が必要であると考えられる。

(科学研究費〈基盤C:24593397研究代表：金城やす子〉の助成を受けて実施した。)

引用文献

- 1) 社会福祉法人日本保育協会 (2009) 『保育所のあり方に関する調査研究報告書－平成21年度』。
- 2) 小野寺芳子 (2014) 「保育所看護師の役割」, 『全国保育園保健師看護師連絡会保育園保健セミナー』。
- 3) 金城やす子, 松下聖子, 八田早恵子 (2014) 「保育園における障害児や医療的ケア児の受け入れと課題

－保育園看護職の配置との関連において－ (第1報)』, 『第20回日本保育園保健学会』。

- 4) 丸山有希, 高田哲 (2014) 「保育所・園 (保健施設) におけるけいれん性疾患の管理の現状と課題」, 『小児保健研究』, Vol.73, No.5, pp.706-711.
- 5) 福井逸子 (2011) 「保育所における病児・病後児保育の必要性－石川県内の保育所でのインタビュー調査を通して－」, 『保育学研究』, Vol.49, No.1, pp.63-72.
- 6) 神谷昌美, 山城枝梨子 (2014) 「保育保健の充実に向けた八重瀬町保育園看護師会の取り組み」, 『第20回日本保育園保健学会』。

参考文献

- 官野悟郎監修, 日本保育園保健協議会編 (2013) 『保育保健の基礎知識』, 日本小児医事出版社。
- 金城やす子, 比嘉憲枝, 神谷昌美, 山城枝梨子 (2014) 「保育園看護師の支援体制の構築に向けて－定期的な勉強会・研修会の実際とその意義－」, 『沖縄の小児保健』, Vol.41.
- 社会福祉法人日本保育協会 (2012) 『保育所における低年齢児の保育に関する調査研究報告書－平成24年度』。
- 社会福祉法人日本保育協会 (2013) 『保育所における業務改善に関する調査研究報告書－平成25年度』。
- 八田早恵子, 金城やす子, 松下聖子 (2014) 「保育園で働く看護職が感じる保育保健に関する業務上の困難感 (第2報)」, 『第20回日本保育園保健学会』。
- 無藤隆, 民秋言著 (2008) 『幼稚園教育要領保育所保育指針ガイドブック』, フレーベル館。

The Actual Conditions of Nurses Who Support Health Care at Nursery Schools

HATTA Saeko, KINJO Yasuko

Abstract

Placement of nurses at nursery schools has been demanded in order to practice infant care and child health for children with various needs, and the number of nursery schools where nurses are stationed has been gradually increasing. In order to elucidate the actual conditions of nursery school nurses at present and what work roles are expected of nurses by nursery schools, a questionnaire survey was conducted for directors of 2,025 nursery schools across the country. When nurses were already stationed at nursery schools, a questionnaire survey was conducted for those nurses as well. We received 649 responses from nursery schools, out of which 351 responses (91.6% of 383 nurse-stationed facilities) were from the nurses. The average number of years of experience as a nursery school nurse was 6.8 years ($SD \pm 6.3$), and 134 nurses (37.9%) had pediatric nursing experience. 259 nurses (79.8%) had adult nursing experience, which showed the highest number, out of which 163 nurses (63.2%) did not have pediatric nursing experience. 280 nurses (79.8%) felt the number of children with developmental problems was "greatly increasing" or "increasing," and 82 nurses (23.4%) stated that "placing a full-time nursery school teacher is desired." As for duties at nursery schools, 270 nurses (76.9%) replied that they were "difficult" or "more difficult than expected." The results showed that duties at nursery schools were frequently performed without pediatric experience and a nurse was stationed alone with the children during her first meeting. Thus, a large number of the nurses felt that the task was more difficult than they thought and had difficulties dealing with the situation. The results revealed that clarification of the duties for a nursery school nurse, cooperation with other sorts of occupations, information exchanged among nursery school nurses, and opportunities for training are necessary to support nursery school nurses.

Keywords: child health, nursery school nurses, nursery schools, children with developmental problems